

# 人外魔境

地軸二万哩

小栗虫太郎

青空文庫



## 魔境からの使者

——折竹氏、トルキスタン中央亜細亞へゆく。世界の屋根、パミール高原中の大魔境「カラ・シルナガン大地軸孔」をさぐるため、近日ロンドンを出発、英印連絡空路により、アフガニスタンのグワダールへ赴くおもむ予定。

とこんな記事が、ロンドン中の新聞を賑にぎわしたのが、十日ほどまえのこと。英帝皇后ご同列の米大州ご訪問や、アラビアオーマン国の王子ご新婚などに併せ……ともあれ、スペースを食った大物記事の一つ。それが、十日ばかり後に大難関に逢ほうちやく着し、あれよあれよという間に折竹参加という、大報道価値ニユースヴァリュがかき消

えてしまうとは……

というのは、次のような声明書、「カラ・シルナガン大地軸孔」行きを断念するという意外な折竹の発表が、朝刊締切後の深更の各社をおどろかした。

——ドイツルフト・ハンザ航空会社の主唱になる「大地軸孔」探検に小生は不参加の意を表明す。なお、同探検隊が小生の攻撃計画を採用するも、それにはなんの異議なきものなり。ハーケン・ク鍵十ロイツ字旗の、魔境に翻えるを祈りて。

これには、各社ともアツと目を剥むいたのである。なんてこった、じぶんが計画をたて隊長にまでなりながら、まさに出発という間際にスイと身を退くなんて……これまで度胸六分の戦車的突進を

誇りとした彼を思えば、ますます分らなくなってくる。きつと、これには事情があるのだろう。ただ心境の変化、電撃的翻意くらいで、そう易々やすやすと片付けられるものではあるまい。と、事の真相を測りかねた各社の猛者連もさが、翌朝折竹の宿へ目白押しに押しかけてきた。

彼が泊まっている「マルバーン・ハウス」というのは、ロンドンの西郊チエルシー区にある。この区はロンドンの芸術家街クワルチエ・ラタンといわれ、都心を遠くはなれた川沿散歩道チエイン・ウオークのしずけさ。が、いま部屋のなかは喧囂けんこうたる有様だ。「タイムス」「デリー・テレグラフ」をはじめ各国の特派員。なかには、前作、「第五類人猿」のアマゾン奥地探検のとき関係のあった、「世界新報エル・ウニヴェルサル」と

いうペルー新聞までがいる始末。

心境の御変化はどういう理由で……あなた個人の、身辺的事情？……それとも、土地柄政治的原因で……と包囲攻撃のなかで静かに<sup>けむり</sup>莨煙をたて、折竹は慙然とガウンの紐をいじっている。やがて、鎮まるのを待つて、ニツと笑い、

「別に、どうこういうような派手派手しい理由はない。風……。僕の翻意の原因は、風にある」

「へえ。風がね」

とロイド眼鏡をひからせてまっ先に乗りに出してきたのが、「スター紙」の山岳通マクブリツジ君。

「つまり、仰<sup>おっしゃ</sup>言る意味の風は、季節<sup>モンスーン</sup>風でしょうね。しかしそ

れはとうに計画プランのなかへ織り込みずみじやありませんか。季節風の影響のない五、六月中に、探検を完了するというのが既定の計画だしたら風の影響などは何もないじゃないですか。むしろ、驚異の征服をなし遂げた、引き上げ時にですね、季節風モンスーンの猛雨くらいあるほうが、劇的でいいですよ。征服者折竹の風貌いよいよ颯さっそうとなり……映画班も悦ぶし、われわれも助かる」

「ハツハツハツハ、人の苦しみを悦ぶのは、ジャーナリストくらいだろう。だが、季節風以外にも、風の問題はあるよ」

と、きっぱり言われてもパミールの辺りで、風の問題といえは季節風以外にはない。はてなど、誰にも見当がつかないところへ、「なんだ、諸君は分らんのかね」

と、一わたり折竹がぐるぐるつと見廻して、

「風にもよりけりで、いろんな風があるが……、なかでも一番下らんやつに、臆病風というのがある。そいつが、『大地軸孔』だけはぜひお止めなさい。あんけんさつ暗剣殺と三りんぼうをゴツタにしたよ  
うな、あすこへ行けばかならず命はない——と、僕に切実にいう  
もんだからね。こつちも、考えてみると成程そのとおり。よく、  
こんな計画でゆく気になったもんだと、再吟味の結果、慄ぞつとな  
ったほどだよ」

最初はくだけた口調で冗談まじりだったのが、しだいに引き緊  
つてき、悲痛の色さえ帯びてくる。また聴くほうは聴くほうでガ  
ンと殴られたように、暫くのあいだなんの声もなかったのだ。



あの、折竹がどうしたというのだろう。猪突ちよとつ六分、計画四分という、彼の信条はどこへ行ってしまったのか。と、過去の彼にくらべればあまりな変り方に、まったく、真実「大地軸孔」というところは、彼がいうように征服不可能なのかと、誰しもそう信じてしまったのである。

しかし、ソ連、インドにはさまれた「大地軸孔」の位置。新しんき

疆よう、パミールからかけて南下しようとするソ連勢力と、必死にインドをまもうろとするイギリスの防衛策。ちようどその間へ自然の障壁のように「大地軸孔」をふくむアフガニスタン領が伸びている。してみると、いま独逸ルフト・ハンザ航空会社が純学術的探検の名目で、この秘境を暴露しようというのが、黙過されるだろうか。ソ連に

は、ここが明かになれば対印新攻撃路。おそらく天与の好機と、期待しているにちがいない。がそれに反してイギリス側には、この秘境暴露がひじょうな痛手になるのだ。

インドへの道——その間に横たわる大秘密境「カラ・シルナガン大地軸孔」。

そうだ、きつと英官辺からの圧迫があつたのだらう——と、折竹翻意の理由をこう睨うずみたい気持が、誰の胸にも疼うずいていたのであるが……。国際紛争裡におどる快男子折竹の姿は、まだ彼も言わず、作者も秘、秘である。ではこの、大地軸孔とはいかなる魔所であろうか。

北にパミール高原、西南にはヒンズークシ、南東にはカラコルム。おのおの、二万フィート級以上が立ちならぶ大連嶺が落ち合

うところが、いわゆる「パミールの管」のアフガニスタン領である。ではここが、なぜ永いあいだ未踏のままであつたかというに、それは、「大地軸孔」をかこむ『Kyam 《キヤム》』の隘路に、世界にただ一つの速流水河があるからだ。温霧谷キヤムの、魔境の守り、  
ギースバツハ・グレッツチエル  
 速流氷河。

グリーンランドの北端にあるアカデミー氷河群に、一日四十メートルをながれる韋駄いだてん天氷河があるけれど、これはおそらく、その速度の十倍以上であろう。轟々ごうごうとひびいて摩擦音を轟かせ、地獄の大釜がたぎるような氷擦の熱霧をあげながら、日速四百十九メートルといわれる化物氷河の谷。また、温霧谷という名のわけも、これでお分りだろうと思われる。

「つまりだね」

と、折竹が技術的な説明をはじめる。

「温霧谷キヤムの、速流水河をどうして登るかという点で、僕はハタと詰つたんだ。普通の氷河なら、ザツと十マイルばかりを六十年もかかる。ところが、温霧谷の先生ときたら、化物以上だからね。

猛速、強震動を発し、登行者を苦しめる。突然、数丈もある氷塔が頭上に落ちてくるだろう。また、なにもない足下に千せんじん仞の氷クレヴァス

罅レが空くだろう。なんていうのがザラだろうという訳も、すべであの氷河の猛速の禍いだ。それに、氷擦のはげしさで、濃のうち

稠ような蒸気が湧く。それが原因となる氷河グレイシヤル・ファチーグ疲レ勞レに、マア

僕らは二時間とは堪えられまい」

「驚いた。あなたにも似ない、大変な弱音ですね」

と片隅のほうで嗤<sup>わら</sup>うような声がすると、

「そうとも、化物氷河と闘えるもんじゃない」

と、折竹が即座にやり返す。そしてその、温霧谷<sup>キヤム</sup>の速流水河を十五マイルばかり登ったあたりに、大地軸孔がおそろしい口をひらいている。

作者はいま、便宜上「大地軸孔」などといっているが、その

カラ・ジルナガン<sup>カラ・ジルナガン</sup> ≒ Kara Jilnagang ≒ というのは中央アジア一帯の通称で、「黒い

骨」というのが正確な意味になる。で今、もしもその辺りを絶好の月夜にながめたとしたら……。雪嶺銀溪、藍の影絵をつらねているワカン隘路<sup>パス</sup>のかなた、銀蛇とうねくる温霧谷氷河の一部が、

ときどき翳<sup>かげ</sup>るのはおそろしい雪崩<sup>なだれ</sup>か。いや、その中腹にくつきりと黒く、一本の肋骨のようなものが見えるだろう。それが地獄の劫火<sup>ごうか</sup>ほの見える底なし谷といわれている、黒い骨の「大地軸<sup>カラ・ジルナガ</sup>孔<sup>ン</sup>」。

そこは、たぶんめずらしい「*Niche rift*」<sup>ニーチ・リフト</sup>ではないのか。つまり、壺形をした溪という意味で、上部は、子安貝に似た裂<sup>クレ</sup>罅<sup>ヴァス</sup>状の開口。しかし、内部は広くじつに深く、さながら地軸までもという暗黒の谷がこの「大地軸孔」の想像図になっている。ではここが、なぜ世界の視聴をいつせいに集めているのか。というのは、怪光があるからである。

ときどき、地底の住民の不可解な合図のように、<sup>かせん</sup>火箭のような

光がスイスイと立ちのぼってくる。時には、極オーロラ光のように開口  
 いっぱいに噴出し、はじめは淡紅ピンク、やがて青紫色に終るこの世な  
 らぬ諧調が、キラキラ氷河をわたる大絶景を呈するのだ。しかし、  
 このパミールに絶対に火山はない。あるいは、その底には奇怪な  
 住民がいて……というのがますます奇想をつのらせる、「大カラ・ジ地  
ルナガン軸孔」の怪魔焰の謎。

「いずれは、僕より上等な探検家がでるだろうからね。そのとき、  
 その先生に『大地軸孔』を降りてもらおう。下せど下せど綱は底触  
 れず、頭上の裂罅も一線とほそまり——なんていうのが、地下鉄チューブ  
 売りの赤本ほんにあるよ」

最後に、折竹は淋さびしそうに笑い、その日の会見はそれまでにな

った。人々が去ったあとのがらんとしたなかで、暫く彼は物思いにふけていた。やがて、ベルを押しして部屋付女中を呼び、

「君、昨日あのザチという婦人は、来なかつたかね」

「いらつしやいませんわ。でも随分、あの方変つた服装をしていらつしやいますわね。顔チャードル隠しをしたり皮鞋サンダルをはいたり……やはりあの方は近東の方でしょうね」

「そうらしい」

と、折竹は憮然とうなずいた。彼にいま、そのザチという婦人が、頻ひんびん々と訪れてくる。氏素姓も知れず国籍もわからぬが、姿顔といい気高さに充ち、どこか近付き難いところのある四十かっこ恰好の婦人だと——一度顔チャードル隠しをのぞいた部屋付女中がいうの



である。

もちろん、彼はその女には逢わない。こんな、近東人らしい婦人と接近などした日には、ますます彼の周囲には厳戒が加えられ、厭な日々が続かなくてはならないからだ。実際「大地軸孔」参加発表以来の英官辺の神経は、びりびり彼にも響いてくるほど、鋭いものになっている。第一、彼に接近するものは給仕人をはじめ、残らずそれを機会に変えられたような始末。そんな情勢のなかでその婦人と会ったなら、ますます此方のほうで事を構えるようなもんだと、——彼はザチという婦人を極力避けていたのだ。

すると、そのザチが痺れしびをきらしたように、つい二、三日まえ手紙を寄越したのである。それをみたとき、まるで悪夢裡のよう

な言いようのない驚き、また同時に、もしもこれが芝居ならと思つても、奥底知れない怪婦人ザチの正体を、どうにも彼は見破ることができないのだ。さて、その手紙は次のようなものである。

魔境の土をまもるため、お願いがございます。どうか「大地軸孔」のしたの平和な民どもの、静かな生活をお乱しくださいませんように。私たちは、じぶんの土を護るため、侵入者をふせぐため……ある必要な手段をとるに先立つて、一応お願いいたします。いま、血をみずにすみませすことは貴方さまのご一存で、「大地軸孔」ゆきをお止めになることですね。これは、貴方さまのため、私どものため、ぜひ枉<sup>ま</sup>げても、お聴き入れねがいたいと存じます。

地底の女、ザチより

晦冥<sup>キンメリア</sup>国 大油層

魔境からの女、やはり「大地軸孔」のしたには住民がいるのか。暗黒中の生活はどういうものだろう、どんな文明をもち、どういう衣食住をし、あの一生陽の目をみない大暗谷にいるのか。と、まだ夢を追うような醒めやらぬ気持のなかで、折竹はつくねんと考えていたのだ。

しかし気が付くと、どうやらこれが眉<sup>まゆ</sup>唾<sup>つば</sup>のもののようにも思われてくる。「大地軸孔」のしたの晦<sup>かい</sup>冥<sup>めい</sup>国の女なんて、どうも

こりや芝居がすぎるようだ。きつと、その女を躍らしている闇の手があるのだろう。と、思うが見当も付かない。結局、ザチのことは半信半疑に過ぎてゆくのだった。とその時、部屋付女中が窺うような目をして、

「あの方を、ほんとに旦那さまは、ご存知ないのですか」

「知らんねえ、一向イランやあの辺の人には、近付きがないからね」

「そう、じゃ私、勘違いしてたのかしら……」

「どんな事だ」

「じつは、私、こう考えていたんですの。どこか、近東の古いお寺から、旦那さまが宝物をお盗みになった。その跡を蹤けてはる

ばるあの方が、『ムーン・ストーン月長石』のように追つてきたんじゃないかしら……。宝物を返せ、さもなくば殺してしまおうぞ——つて、いま、旦那さまは嚇されてるんじゃない　　ホホホホホ、お怒りになつちやあたくし、困りますわ」

こんな冗談から、なにか引きだそうとする部屋付女中の態度も、折竹には不愉快な一つだ。しかし彼は、なぜ「大地軸孔」ゆきを断念したのだろう。こういう、英官辺の厭がらせのためか……。それとも真実「大地軸孔」は征服不可能なのか。いや、彼のゆくところ砕けざる魔境はない。では、それはどういう理由わけだろう。

——探検とは、国という砲身のはなつ弾丸なり。

この言葉を、彼は忘れていたわけではないけれど、いまロンド

ンにいてイギリス人の生活をみてみると、しみじみその言葉が胸うつように響いてくるのだ。いまイギリス人は、わずかを働いて多くをとつている——その、余裕しやくしやく々しやくぶりはなにに由来するインド、オーストラリア濠州アフリカ、南阿、カナダ——みな一、二世紀まえの探検の成果だ。

するとじぶんにも、民族の血をとおしてした探検があつたらうか。時代がちがうとはいえ最小の効果でも、国にたむける意味の探検があつたらうか。文化の貢献者という美名にあこがれて、ただそれだけのために働いていたのではないか。と思うと、泣きたいような気持になる。これまで彼がしたすべての事が、いまは些細な塵ちりのようにしか見えなくなったのだ。もう、大地軸孔へ行く気力

などはない。

まして、ルフト・ハンザ独逸航空会社は純文化的意味だというけれど、この

「大地軸孔」探検はそんなものではないらしい。近東空路を、はるばるアフガニスタンの首府カブルまで伸ばしてきた、独逸航空会社には一層の野心があるのだろう。英ソのかんしょう緩衝地帯である「大地軸孔」一帯を精査して、ナチスのくさび楔を南新疆のうちこもうというのではないか。また一方、この探検が成功すれば利益を得るものに、対印新攻撃路をにぎれるソ連がある。いずれにしろ、これは他国を益するにすぎない。ご免だ。くだらん英雄になつてお先棒に使われるよりは、暫く故国へ歸つて、ゆつくりと休もう。と、彼はついに参加を思い止まったのである。

窓をあけた。近ごろは、こうして窓をあけ往来をながめることが、彼には習慣のようになっていゝる。ザチ——。あの「大地軸孔」の女と称する神秘的な婦人が、もしや彼に会おうとして、うろついていやしないだろうか。会いたくはない。が、どんな婦人だか、一目だけみたい。いまは、彼の脳裡からとり去ることが出来なくなつたほど、ザチのことは強烈なものになつていゝる。

（事実、「大地軸孔」のしたには、住民がゐるのだろうか。いや、あの女はまやかし者にちがいない。じぶんにも、「大地軸孔」攻撃の興味を湧かさせようと、あるいはソ連からでも仕立てられて来たのではないか。G<sup>リ</sup>・P<sup>ピ</sup>・U<sup>ン</sup>カ<sup>カ</sup>——。マア、底を洗えば、そんなところだろうか）



土を守る、探検を妨害する——なんぞといいながら逆効果をねらい、かえつて「大地軸孔」へじぶんを惹きよせようとする。きつと、ザチはソ連の女だろう、と、折竹はそういうように考えていた。しかし、どこにもザチらしい婦人はいない。ただ、テムズを越えてみえるバタツシー公園の新芽の色が、四月はじめの狭霧にけむり、ひょうびょう縹渺として美しい。

翌朝は、ロンドンの郊外クロイドンの飛行場。アームストロング・ウィットウアース機の車輪一度地をはなれば、鵬翼欧亜の空を駆り日本へと近付いてゆく。が、まず彼は事務所にいつて、ブラッキング・シート同乗の旅客表をしらべたのである。しかし、ザチの名はなかつたのだ。

「たいていは、アラビアオーマン国の王子ご新婚式に出むかれる、新聞社の方々や外交関係でございます」と、折竹に旅客掛りが説明をする。

「ご婦人　それはお一人ですが、ハツキング卿夫人で。いいえ、外国の方は貴方さまばかりで……」

やがて、機はふんわりと空中に浮び、朝の湿気のもとに広茫とひろがっているクロイドンは、はや見えずになってしまった。左様なら、また、信念を充すものがくるまで、探検よさらば。と、翌夜捲きこまれる奇怪な運命があるのも知らず、彼は胸をくもらせ、無限の感慨にひたっていたのだ。やがてパリ、イタリアのブリンデイツシ、アテネ、アレキサンドリア。

翌日は、バグダット、バスラを過ぎアラビヤ半島の突角にある  
 “Sharjah 《シヤルジャー》”<sup>エーヤ・ポルト</sup>へ着いたのが深更の二時。荒い城  
 壁にかこまれた、沙漠中の空港。すると、機体を下りたつ  
 た彼のそばへ、歩み寄ってきた男がいる。まず、その男は慇懃<sup>いんぎん</sup>  
 な礼をして、

「ポルトガルの御使節、エスピノーザ閣下にいらせられましょう」  
 「へえっ」

と彼はびっくりして、叫んだ。

「日本人だ。いくら、日本と<sup>ポルチユゲー</sup>葡萄牙人が似ているからって、間違  
 うにもほどがある。まして、俺は閣下じゃない」

「ご冗談を」

とその男は引きさがる気配がない。

「オーマンの、華の御儀へご参加になるエスピノーザ閣下であることは、手前よく存じております。また、お気さくの方で下々のことまで、よくおわきまえでいらっしやる事も……」

「ハツハツハツハ、上にも下にも、下情しかしらん男だよ」

となんだか折竹も面白くなってきたところへ、とつぜん彼の咽喉がぐびつと鳴り、顔の表情が凍てついたようになってしまった。銃口が、彼の下腹部にびたりと付けられている。

「これが、エスピノーザ閣下を遇する方法かね」

さすが、折竹の声は顫えもせず<sup>ふる</sup>に、発せられる。そうして、眼前の男をつくづくながめると、それは狐のような顔をしたイギリ

ス人。さてはと、彼は何事かを覚つたのである。そこへ、その男が圧するような声で、

「折竹さん、一言ご注意くださいおきますが、われわれには力がある。どうです、ここで荒らだつて、からだを失くしますかね。イギリス保護領のこの空港には、いたる所に銃口が伏さっている。マア、暫くご辛抱願いましょう」

アラビヤ兵の白衣バーナスが点々とみえていたのが、眼隠しをされ、まっ暗になる。男は、彼を自動車にのせ、一時間ばかり運んでいった。やがて、家らしいものに着くと、眼隠しをとられる。彼のまえには顎骨あごのふとい、大きな男がぬうつと立っているのだ。五十ばかりでほとんど表情がない。それが却すくつて、悚すくめるような凄

味。

「儂わしは、ある任務の男で、セルカークといっています。今夜は、あなたとは大変不本意な会見で……」

「驚いたですよ。マア、大抵なところでご大赦に願いたいですな」といまは度胸もすっかりすわった折竹は、臆す色もなくいけしゃ生いけしゃ洒あしやあ々として、

「時に、ここは何というところで……」

「なるほど」

とセルカークは冷酷そうな笑いをうかべ、

「ご自分の、墓になる所だけはご存知なくてはなりませんまい。ジエベル・カスルン。付近には製油所があります」

それなり、暫くはなんの声もなかったのである。夜の沙漠の冷々としたなかで、にぶい灯りが二人を照らしている。ちよつと、折竹のからだ<sup>ふる</sup>が顫えたようにみえた。墓——なん度胸に問うてもおなじ意味の答えを、彼はぼんやりと味わっていた。死ぬ、そうとすれば、どんな理由で……。

「とにかく、危険な存在は殺<sup>や</sup>らにやなりませんな。あなたは、アフガニスタンのダワダールで降りて、『大地軸孔』へゆくつもり……ねえ」

「いや、大変なちがいだ。このまま僕は、ずうつと本国へ帰る」「ハツハツハツハツ、こつちでそう信じている以上、釈明は要りません。つまり、あなたをあの『大地軸孔』へは遣りたくない――

—その意味はお分りだろうと思います。あの辺のすべてが不明であるということが、わがインドの貴重な守りになっている。しかし、もし貴方がゆけば、どうなるか分らない。ヒルト博士らのほかの人たちはとにかく、こっちは、貴方一人の超人力をおそれている。インドを、ソ連の南下策から完全に護らにやならない」

「ふむ」

と折竹は笑うような表情をして、

「あまり、偉そうに見られたのが、とんだ災難でしたよ。いや、デモクラシーも当てにはならん」

「お気の毒です。しかし、これが任務ですから」

とセルカークが心持頭をさげ、彼にペル・メルをすすめた。そ



の莨煙けむりのなかで暫くのあいだ、折竹はじつと考えていたが、

「やれやれ、おなじ事なら探検で死んだほうがいい。僕は『大ダシユ

塩ト・イ・カヴィル 沙 漠』地下の油層をさぐるわけだったので」

と、セルカークの頭がヒョイと上って、

「油層」

と、彼は惹かれたような表情になった。

「そうです。あなたの想像は不幸にして違っているが、僕のほう  
のはおそらく凶星でしょう。それは、東は外蒙からサハラ沙漠ま

で延びているといわれる、地下の大想像洞、『グレート・ブラインド・ヴ 大 盲

谷アレー』。ギリシアのホーマーでさえが晦冥国キンメリアといっていた、

大盲谷が実際にあるらしいのです。むろんそれは、土地によって

高低がちがうでしょうが、岩塩と、石灰岩層を貫いて流れている。しかも、その大盲谷二万マイルのうへは豊潤な油層だ」

### 招かれざる女王

地下の大盲谷、暗黒の二万マイル。その存在は非常に古いころから、想像されもし書かれてもいるが、もしこれが余人の口からでたのだったら、即座にいっしゅう蹴されたにちがいない。いまは、セルカークも妖あやかしに会ったような顔。

「なるほど、その想像洞のうへは、大沙漠帯ですね。それに、所々方々に油田が散らばっている」

「そうですよ。全部油脈は岩塩油田であるか、それでなければ、石灰岩層に入っています。おそらくその大盲谷はソ連領にも伸びているでしょう。ねえ、エンバの油井は岩塩油田でしょう。また、コーカサスののは石灰岩層にあります。とにかく、岩塩を溶かし、石灰岩を溶かし地下へ滴る石油が大盲谷をつくったといわれる」

ああ、大盲谷をうねくる、石油の大暗流。いかな名画工、いかな名小説家といえど、その光景を髣髴ほうふつとすることはできないだろう。しかしそれは、ただ想像だけとするならまことに素晴らしいがと……暫く経つうちに半信半疑の色が、セルカークの顔を覆ってきたのだ。

「しかし、それは実際問題ではありませんね。ただ奇想であり、

頭脳の遊戯であり……。お話だけはひじょうに面白いですが」

「では、イランの大ダシユト・イ・カヴィル塩沙漠を、どうお考えになる」

と折竹が突き進むようにいった。

「あすこの、踏みいるものを焼く、おそろしい熱気は。万物焼尽さずんば止まない、見えない魔焰は？」

“Dash-I-Kavir 《ダシユト・イ・カヴィル》” —— そのおそろし

い塩の沙漠はイラン国の首府、テヘランの東方二百マイルのところにある。これは、マルコ・ポーロ時代からひじょうに名が高く、すべてを焼きつくす恐怖的高熱度。砂は焼け塩は燃え、人畜たちまちにして白骨となるという、嘘も隠しもない世界の大驚異。ではその、見えない魔焰がどうしたというのか。折竹は言葉を次い

で、

「つまり、僕の私見をいいますとね。あれは、地下の油脈から洩れる天然ガスだと思ふのです。それが、塩沙の輻射熱でパツと燃えあがつたやつが、ふわふわ浮遊して歩くのでしよう。ねえ、あの見えない焰はガソリンのお化——。高オクタン価八〇くらいの、おそらく航空用燃料ギヤスとしたら空前のやつが、あの地下には無尽蔵にあるのです」

見えない魔焰の正体が各国ともあせっている、高オクタン価の良質油とは。が、折竹の粟粒のような汗。ここが、助かるか助からないかの瀬戸際という意気が、目にも顔にも、燃えるように漲みなぎっている。案の定、セルカークは恍りうつつとした声で、

## 「航空用良質油」

とたつた一言、それを、折竹が追つかけるように、

「そこで、あの沙漠に噴出孔があるか、ないか。たぶん、地軸までもというような、裂け目があるだろう。多量の天然ガスを絶えず噴きだしている、地底までの穴がきつとあるにちがいない。しかも、それが大盲谷へ達している。と、僕はこう睨にらんでいるのです。ねえ、地下からの採油も乙なもんですぜ」

## 「航空用良質油」

とセルカークがふたたび呻いた。折竹がならべるでたらめもさすが彼だけに整然たるもの。それが駆りたてる夢幻黄金境。いまやセルカークは大欲にうめいている。

「儂もむかしは、ギロウ・ウアーク汲出機をもつて、掘りあるいたもんでし

た。そして、良い油井ウエルに出逢ったのが、三十のときだった。とこ

ろがね、ウエーク・ストリング遮水管の抜き出し処置がわるく、火花をおこし

て焼けてしまったのですよ。ねえ、若いころは、誰にも夢がある。

それが、五十になった今、よみがえ蘇つてくるなんて」

と、だんだんセルカークは恐ろしげな顔になってゆく。しめた、

と、折竹がほくそ笑むところへ、

「じゃ、なんでしよう。『大地軸孔』の怪焰も、おなじ意味合い

のもんで」

「そうです。あれも、『大盲谷』中の一つの覗き穴です。しかし、

大盲谷をうずめる全部の油量は？ セルカークさん、測れますか

ね」

と、<sup>そそ</sup>唆るようにセルカークの顔をみる、折竹も相当の役者ではないか。俺を放て……そして、<sup>ダシユト・イ・カヴィル</sup>大塩沙漠へやり、覗き穴を探させろ……そうすりや、セルカークは億万長者になれる。いや、億どころか、百兆、千兆。いずれは、<sup>バシク</sup>英蘭銀行がお前の紙幣<sup>さつ</sup>で埋まるだろう……ここだ、一生の運を掴<sup>つか</sup>むか掴まないか

するとその時、おなじ思ひはセルカークにも、こいつを、釈放したら、どんな事になる　うまくいいい当てて覗き穴を発見し、俺を地下採油の超富豪にしてくれるか。まったく、あの沙漠だけは「<sup>アングロ・ペルシヤン</sup>英波石油」も捨てている。そうだ、<sup>しくじ</sup>失敗りや、焼かれて死ぬ。馬鹿をみるのは、此奴だけの話だ。



やがて、二人のあいだに盟約が成りたつた。しかし、まだ折竹に完全な自由はない。

「あんたは、当分儂のそばを、離れんでもらいたい。明後日、わしはムスカットへゆく。例の、オーマン王子ご新婚でしてな。むろん、あんたへもご参列を願うが……。マア、誰しも珍客と思うじやろう」

それから、折竹は部屋を宛てがわれたが、その夜は眠れぬ一夜であつた。月のない砂上は、ぼうつとした星明り。だが、彼はやつと助かつたと、じつに躍るような気持。そのうち、彼が出方出まかせに述べたてた嘘が、どうやら真実らしく思われてきた。もともとこれは、彼の想像として腹にあつたこと。ただ、ダシユト・イ大塩

・カヴィル  
沙漠のあの熱気だけは、急場の凌しのぎに絞りだしたのではあるが……。

その、たんなる想像が本物になる。少くともなりそうだ、と考えた。すると、一度は死ぬんだったという捨身な気持が、彼に日本人らしい犠牲の念を呼び起してきた。

（大塩沙漠へゆくことは、けっして無意義ではない。もしも覗き穴があつて「大盲谷」に達していれば、俺は「英波石油」の油層の下へゆけるのだ。またもし、大盲谷の広さが真実とするならば、ソ連コーカサスへもメソポタミア油田下へも、なんとか手段を尽せばゆけないものでもない。

そうだ。故国一朝有事の際の、破天荒な電撃——。一隻の潜水

艦、十人の挺身隊。もし覗き穴さえわかれば、それで事足りるではないか。油層下からの処置で、油田は渴れるだろう。また、十人の犠牲で全油田爆破ともゆける。その下地を、俺はいま作りあげようとするのだ。で俺が、もしも大塩沙漠から生還した場合、俺は国家への協力をほこれる。また、万が一の際は知られない犠牲として、俺は個人としての最高の死を遂げることになる。犠牲——。それも、知られないほど、美しい)

夜が明けかかり、砂丘の万波にようやく影が刻まれてゆく。空には、獅子座ししが頭をさげて西の空へ下りかけ、やがて東からのぼる東亜の太陽の前駆、白鳥、ケフェウス、カシオペアが薄明のなかをのぼってくる。それを……折竹はさし招くような意気だった。

ところが、その二日後の夜。オーマンの都ムスカットで行われた王子ご新婚式に不思議な出来事が起つたのだ。

りようそう  
稜 嶒

たる岩山のしたの町ムスカットのその夜は、イラン、

エジプトご新婚の 賓 客 ひんきやく をそっくりひき受け、ヨーロッパ社交

界に鳴る綺やかな連中が、ふうふう暑熱にうだりながらオーマン

湾を渡つてきたのだ。まず 客 人 まろうど は、英皇太后メアリー陛下の御

弟エースローン公、ドイツはモスクワ 駐 ちゆうきつ 大使シュレンバー

グ伯、またエジプトの女王ナズリ陛下、イタリヤは皇甥スポレー

ト侯爵。こうした方々が、白壁の小家が楡比 しつび するこの狭衝の町、

また、イラクのバグダットと肩をならべる世界一暑い首府の——ムスカットを見ちがえるように飾ってしまったのである。

その海岸の広場にある王宮といつても、簡易な三層の漆喰建しつくいだてであるが、ともあれ、オーマンを統すべる大元首のいますところ。花火、水晶の燭キャンドル架まぼゆ眼眩まぼゆいなかに、今宵の客人がいと静かに参上する。

「もう、おいではこれだけであろう」

「ふむ、いかさますみ申したようであるが」

裸足はだしの、二人の式部官が次第書とつき合せてみると、もうお客はこれで終わっている。きょうの御儀に日本綿布バーナスの外衣バーナスをそろえた、儀仗兵も休ませなくてはならない。さあ、腹も減ったし、羊も焼けている。胡椒飯ピラフを腹さんざん詰めこもうではないか——となつた時。

とつぜん、昇降階のしたでザザザという太鼓の音。お客だ、と一同は慌てふためいて列をそろえた。とそこへ、たくみにガウンを捌いてくる藤ろうたけた一人の婦人。みれば、頭上には王冠を戴いている。

「失礼でございますが」

と、式部官の一人が恭うやうや々しく訊ねたのである。

「次第書にございませんので、お言葉を願います。いずれの国の、どなた様でいられますよう」

「キンメリアの女王」

「へっ」

「このオーマンは、なんという無礼な国である」

とその婦人が凜然りんぜんと言ひ出した。

「わたくしは、前もつて儀式書を頂いている。それには、使節の随員は宮廷よりの馬車に分乗し、使節の馬車に前行すべし——とありますが、随員のはおろか、わたくしのも参りませぬ。当国は格式を重んじ典礼を尊ぶ点に於いて、回教国一と聴いておりますが」

「恐れいります」

と、式部官が首をさげた時その婦人の姿は、昇降階に続く「騎士の間」に消えていたのである。その場には、侍従長やら將軍やらがいたが、凜とあたりを払うその婦人の威厳には、誰も止めるものがなかつたのだ。

キンメリア——それは地図上にない国である。

生きてゐる氷河

折竹は、舞踏にも加わらず宮苑のなかを歩いてゐた。スミルナの無花果いちじく、ボスラーの棗椰子なつめやし、エスコールの葡萄——。近東の名菓がたわわに実つてゐるところは、魔宮か、魅惑の園のよう。そこへ、日時計のついた噴泉が虹をあげ、風は樹々をうごかし、花卉は樂の音にゆすられる。彼は酒気をさまそうと、ぽつねんと亭ちんにいたのだ。

（セルカークの奴、この辺じやなかなかの羽振りじやないか。マ



ア情報省の機関区長どころだろうが……、どうして領事くらいは敵わんような勢力がある)

そこへ、植込の陰からぷうんと女の匂いがした。棕櫚の花粉のついた裳裾がみえたとき、彼の横手からすうつと寄り添ってきた、女がいる。

「お久しう。折竹さん、ほんとうに暫くでございました」

いわれて、婦人をひよいと見たが、彼には全然未知の女だ。額  
のひろい、思索深げな顔。齢は四十に近いだろうが、ろうろう 蔦々とし  
て美しい。はて、どうもこれは純粹の白人ではないな。と、思っ  
たがなんの記憶もない。

「失礼ですが、奥さまとはどこでお目にかかりましたでしょうか」

「お忘れ？」

とその婦人は婉然とわらって、

「ロンドンでお目にかかったではございませんの」

「サア」

「あたくし、ザチでございますの」

キンメリア

晦冥国の女王、さつき、招かれざる賓客として乗り込んだの

が、ザチだった。折竹はいよいよ捕まったかと思うよりも、夢のような気持で、

「僕がここへ来たことが、どうして分つたのです」

「そりやね、あたくしにも知る方法がありますわ。あなたは、シヤルジャーで旅客機をお下りになり、それからセルカークと此処

へいらつしたのでしよう」

「ふうむ。よく」

と唸った陰にはやはりこいつはと、折竹は警戒を感じたのである。こういう顔は、よくコーカサス人や韃<sup>だつたん</sup>鞑<sup>だん</sup>人の混血児にある。それが、晦冥国の女王なんて神話めいたことで、俺を釣ろうなどとは、大それた奴だ。きつと、ソ連の連中のなかじや、いい姐御だろう——と思うと気も軽々となり、

「いつぞや、僕の『大地軸孔』ゆきにご勧告がありましたね」

「ええ、ぜひそうお願いしたいと、思うのです。覗き穴のしたにわずか固っている、未開の可哀想な連中です。別に、この世に引き出したところで、見世物にもなりません。お捨て置きになれば、

有難く思いますわ」

「しかし、あなたはフランス語をお喋りになりますね。そこは大体、地上と交通のない地底の国のはず。その点がどうも解げせませんよ」

とうとう、ザチはそれには答えなかつた。悲しそうな目をして、じつと折竹をみている。駄目つ、駄目つと……念を押すようなそれでもないような、なにか胸に迫つた真実のものを現わして、

「でも、お目にかかれて嬉しいと思えますわ。人間つて——十年、二十年、交際つきあつていても何でもありませんし……たつた一目でも、生涯忘れられない方もありますわ。お別れいたします」  
と立ちあがったが、またふり向いて、

「こんな齡になつて泣くなんて、可笑しいですわね。でも、こういう時は、誰でもそうよ。誰でも、感傷が先走つて、悲しくなるものですわ。もう、あなたとはお目に掛れないでしょうから」

「そうでしょう。僕も ダシユト・イ・カヱイル 大塩沙漠へゆきますから……」

ザチは、それなり去つてしまつたのである。妙な女だ、脅してみたり泣いてみたり——と思うだけで、いま大塩沙漠ゆきをうっかり洩らしたことに、彼はてんで無関心であつたのだ。その数週後、イランのテヘランへゆき準備を整え、見えない焰の塩の沙漠へむかつたのである。

まず、そこまでの炎熱の高原。大地は灼熱し、溶鉱炉の中のよう。きらきら光る塩の、晦くらむような眩まばゆさのなか。

その、土中の塩分がしだいに殖えてゆくのが、地獄の焦土のよ  
うなまっ赭かな色から、しだいに死体のような灰黄色に変わってゆく。  
やがて塩の沙漠の外れまできたのである。そこは、一望千里とい  
う形容もない。晃こう耀ようというか陽炎というか、起伏も地平線もみ  
な、閃きのなかに消えている。ただ、天地一帯を覆う、色のない  
焰の海。

「そろそろ、儂らも焼けてきそうな気がするよ」

とセルカークがフウフウ言いながら、もうこれ以上はというよ  
うに、折竹をみる。

「死ぬだろうよ。日中ゆけば燃えてしまうだろう」

「脅かすな」

とセルカークは心細そうに笑つて、

「頼むよ。俺は君に、全幅の信頼をかけている」

「マアね、君を燃やすことは万が一にもあるまいが……、とにかく、われわれは日中を避けねばならん。夜ゆく。それで、今夜の強行軍でどこまで行けるかということが、覗き穴発見のいちばん大切などころになる。ねえ、地図でみると、台地があるね。ちやうど真中辺で、奇怪な形をした……」

「ふん、<sup>ヤツデ・クベード</sup>Yazde Kubeda<sup>ダ</sup>か。その『神々敗れるところ』というペルシア語の意味から、あすこは『<sup>ヤツデ・クベード</sup>驕魔台』とかいわれている」

「そうだ。で、これは僕のカンにすぎないがね。得てして、ああ

いう所には裂け目があるもんだ。まず覗き穴は、彼処あそこらしいといえるだろう。するとだよ、然らば黒焦げになる日中はどうするか。それは、深い穴を掘ってじつと潜っている。マアそれで、体力が続くのは一日ぐらいだろうから、夜になったら強行軍で逃げるのさ」

「驚いた」

とセルカークはパチパチと瞬いて、

「じゃ、途中で夜が明けたら、焦げてしまうんだね。決勝点ゴールを間近にみながら黒焼になるなんて、情けない事には是非ならないで欲しいよ」

そうして、夜は零度をくだる沙漠の旅がはじまった。万物声な



くただ動いているのは、二人の影と頭上の星辰せいしんのみ。と、やや東のほうが白みかけてきたころだった。地平線上にぼつりと見える一点。

「こりや、いかん。驕魔ヤツデ・クベータ台へゆかぬうちに、夜が明けてしまふ。おい俺たちはまんまと失敗しくじったぞ」

まったく、痛恨とはこの事であろう。みすみす、目前にみながら此処が限度となると、両様意味はちがうが、二人の嘆きは。：宝の山の鰻うなぎのにおいを嗅ぐ、セルカークはことにそうであった。「畜生、せつかく此処まで来てとは、なんてえこった。オクタン 価八〇、最良航空燃料ギヤスもなにも、夢になりおった。オヤツ、ありや折竹君、なんだね」

と、指差された薄明の地平線上。突兀とっこつとみえる驕魔ヤツデ・クベータ台のうえに、まるで目の狂いかのような、人影がみえるのだ。早速、双眼鏡でみているうちに暁はひろがってゆく。しかし、死の原のここに、鳥の声はない。ただ、薄らぐ寒さと魔性のような人影。やがて、折竹はボロリと眼鏡を落とし、

「ザチ」

と、さながら放心したような眩き、

「ザチ いったい何のこったね」

とセルカークが訊いても聴えぬかのように、

「覗き穴はある。ザチはソ連の女ではなかった。真実、『大盲谷』に住むキンメリアの女王。おい、セルカーク、あれを見ろ」

いわれて、目をこすりこすり ヤツデ・クベード 驕魔台のうえをみると、今

いた——ほんの秒足らずの瞬前までくつきりと見えていた、ザチの姿が掻き消えたように見えないのだ。覗き穴、彼女は「大盲谷」へ降りたのだらう。しかし、追おうにも、暁は濃い。朝の噴射とともに熱殺界となる、此処ではどうにもならないのだった。

しかし、驕魔台のうえでザチを発見したことから、いよいよ

「大盲谷」の実存性が濃くなってきた。そうしてこれには、むしろ手も付けられない塩の沙漠よりかも、カラ・シルナガン「大地軸孔」のほう

を攻撃してはと、なったのだ。そのころ、大地軸孔探検についての、国際紛争が解決した。英ソ双方とも監視者をだすことになり、英はセルカーク、ソ連は、極氷研究家のオフシエンコという男。

また、折竹もセルカークの計いで、この探検に隊長として加わったのである。

沙漠、峻嶮、寒熱二帯の両極をもつアフガニスタン。慄悍無双といわれるヘタン人の人夫をそろえ、いよいよヒンズークシの嶮を越え「パミールの管」といわれる、英ソの緩衝地帯を「大地軸孔」へ進んだのである。いまは、高山生活一か月にまつ黒に雪焼けをし、蓬々ほうほうと伸びた髯ひげを嶽風がはらっている。

そしてちようど、カプールを発った五十日目あたりに、温霧谷キヤムの速流水河の落ち口にでたのだ。

「凄い。ここでは、氷だけが生物いきものだ」

牛ヤクのミルクを飲み飲み、断崖のくぼみから、幹部連が泡だつ

氷河をながめている。氷に、泡だつという形容はちと変であるが、この氷河の生きものの性的性質を、説明するのはそれ以外にはない。噛みあう氷罅クレヴァス、激突する氷塔の碎片。それが、風に煽あおられて機関銃弾のようになり、みるみる人夫の顔が流血に染んでゆくのだ。まさに流れる氷帯ではなく、氷の激流。ここだけは、永遠に越えられまいと思われた。

### 大地軸孔の悲歌

「君、ちよつと折り入つての話がある」

隊が立往生をしてから、一か月後のある夜。こつそり折竹の天テ

幕へ、セルカークが入ってきた。彼は、周囲をたしかめてから、  
密談のような声で、

「取らぬ狸の、皮算用かもしれないがね。いずれは大盲谷の油層が、  
われわれの手に入るだろう。しかし、そうなったとき分け前が出る  
ようじゃ、儂は馬鹿馬鹿しいと思うんだよ」

「へえ、というのはどういう意味だね」

「それは、オフシエンコのことだ」

とセルカークはいっそう声を低め、

「奴は、最後まで頑張るといつている。けさ、君とヒルト博士が大喧嘩をした後で、こっそり奴の意見を聴いてみたんだよ。するとだ、奴は馬鹿に昂然としてね。——任務だ、最後まで君らと共

に——なんてえ、えらい鼻息なんだ」

その日の朝、温霧谷の速流水河の攻撃時期について、彼と独逸航空会社のヒルトとが大激論をした。ヒルトは、速流水河をわたる方法なしと言う。これは練達山岳家としての当然の論。それに反して、季節風モンスーンの猛雨が始まったら登行をするという、この折竹の説は暴論といおうか、まことに、常識外れの馬鹿馬鹿しいものだった。そして、ついに隊は二つに割れ、わずかな人夫を残すほか、引き上げることになったのだ。

そのころは、もう七月にちかく、邪風モンスーンの登音がくらしい雲行から、吹くぞ、薙ぐぞというように、聴えるような気がする。ヒマラヤ・カラコルムに吹きつける、狂暴な西南風ならい。大雨、

烈風となる最悪の時期に、折竹は速流水河をわたると言う。

狂ったか。見す見す死にゆくような折竹の胸に、あるいはこの狂自然を征服するに足る鬼策が蔵されているのではないか。で、結局のこったのは折竹、セルカーク、それにソ連からの監視者オフシエンコの三人。セルカークは、また言うのである。

「それでだよ。儂も、殺るとか除くとかいうようなことは、この際したくない。一つ、君によく説いてもらって、ヒルトらと一緒に帰そうと思うんだ」

「そうか」

と折竹は暫く黙っていた。あれ以来、ますます人相にも奸黠かんかつの度を加えてきた、セルカークを憫あわれむようにながめている。ただ、



氷河の氷擦が静寂しじまを破るなかで……。

「どうだ。たがいに運だけは、無駄にせんように、しようぜ。百億人に一人、千万年に一度、あるかなしかというような、どえらいもんだから……」

「勝手だ」

と折竹は吐きだすように、言った。

「大体、僕の計画にしてからが、九分どおりが運なんだ。妙に、度胸がいいのが玉たまに瑕きずかもしれないが、これも千万年に一度、百億人に一人ど偉い馬鹿みたいなのが出たとき、言いだすような事だ。ねえ、まず吾々は九分通り、死ぬだろう」

「脅かしちや、いかん」

「いや、すべては渡れてからのことだ。しかし、僕は君よりも、オフシエンコを、尊敬する。ただ任務——とは、偉い！」

不興気に出てゆくセルカークの向うに、大地軸孔の怪光があがっている。ぶよぶよ動く淡紅の幽霊のように、尖峰を染めだし氷塔をわたり……それも間もなく一瞬の夢のように消えてしまう。そういう時、折竹の胸にはザチのことがうか泛んできくる。地底の女王、ムスカットでの別れのときの涙。いまは彼も、懐かしくさえなっている。妨害するというが、そんな様子もない。彼女はいま、なにを思っているのだろう。

翌日、ヒルト博士らはずい<sup>ヤク</sup>に去ってしまった。牛をつらねたながい行列を、折竹らは大岸壁のうえからながめている。季節モンスー

風前によくあるクツキリと晴れた日で、氷河の空洞のほんのりとした水色や森のように林立する氷の塔のくぼみが……美麗な緑色を灯したところは灯籠とうろうのように美しい。それも絶えず欠け、しきりなく打衝ぶつかりあい……氷河としたら激流にひとしい不思議さで、人よ、渡るなかれと示しているのだ。

オフシエンコは、真面目そうな、寡黙かもくな男だ。しかし、その日はめずらしく口数が多く、折竹になにかと話しかけてくる。

「その、ザチという婦人のことは、じつにいいですね。大盲谷にさえ入れれば、お遇いになれるでしょう」

「サア、『大地軸孔』の近傍くらいじゃ、どうかしら……。広いよ、とにかく『大盲谷』は両大陸にまたがっている。それも今ま

では、伝説にすぎなかったんだ」

「楽しみですね。しかし、僕のはただ任務だけですから」

「じゃ君は、何処までも行くのか」

「そうですね。国から与えられたものを、疑うようなことはしません」

セルカークの、英人らしい徹底的個人主義と、オフシエンコとはじつにいい対照だ。ところが、その数日後に天候が崩れはじめた。雷が多くなって暗澹<sup>あんたん</sup>たる積雲が、ひゆうひゆう上層<sup>プリマ</sup>風をはらみながら、この溪谷をとぎしてくる。雨ちかし、温霧<sup>キヤム</sup>谷はその名のとおり大釜がたぎるように、濃霧に充ち、一寸の展望もない。「この氷河の氷には、石灰分が多い。だから、猛雨があれば氷塔

に浸みこんで、あの邪魔ものを、ボロボロにしちまうと思うよ。

つまり、氷の石灰分が水に溶けるんだから、あの頑固なやつが軽石みたいになっちまうんだ。で、それが流れるから、平らになる。そこを、僕らが渡ろうという魂胆だ」

そういう、折竹の推測がついに適中した。すごい雨のあつた翌朝、一掃された氷塔をみて、三人はわつと歓呼の声をあげたのだ。濃霧ガスの暗黒の底から盛りあがる氷の咆哮ほうこうを聴きながら、温霧谷キヤムの化物氷河を渡つたのである。しかしそこで、空中索道をつくるのに一日ほど費やし、それまで黒い骨とばかりみえていた「大地軸孔」の口元へ、立ったのが翌朝のこと。

いよいよ、此処——三人は感極まったような面持だ。のぞくと、

まっ黒な中からひやりとした風がのぼってくる。地底の国、アジ  
ア、アフリカ両大陸にまたがる想像界の大盲谷が、いま三人によ  
つて白日下に曝さらされようとする。やがて、垂たらした綱が二百尋フアソムほ  
どになったとき、底に達したらしく、かすかな手応え……。いよ  
いよ、地底の晦冥キンメリア国へ。

「やはり、石油ガス」

とまっ暗ななかで鼻をうごめかし、セルカークが聴えぬような  
声で呟いた。おそらく、どこかに噴出孔があるのだろう。そして、  
岩石が落下するときの摩擦の火花で点火するのが、例の怪光だろ  
うと思われた。

三人は、各人各様の気持——。折竹は、故国のために油層下の

道をきわめようという。セルカークは、オイル・ハンター油脈探しの前身を見事露むきだして、ほとんど天文学数字にひとしい巨大な富を握ろうと……。また、オフシエンコはと……。いくなかにも折竹の、心の琴線に触れるのはザチのこと。彼はいかにしても地底の女王に遇いたかったのである。

その間も、懐中電灯のひかりが四方へ投げられている。石筍はあり天井から垂れている美しい石乳も、どんよりした光のなかでは、老婆の乳房のよう。絶えず、岩塩の粉末が雨のように降ってくる。しかし塩が吸うので毒ガスの危険はなく、三人は安堵あんどして進むことができたのだ。

二万マイルの道、北は、しんきよう新疆のロブ・ノールから外蒙へま

で、あるいはソ領中央アジアへもコーカサスへも、アフガニスタン、イランをとおり紅海のしたから、この地下の道はサハラ沙漠まで、ゆくだろう。そうして、ここに地底の旅がはじまった。

「いい陽気だ」

と、折竹は口笛を吹きながら、

「暑からず、寒からず……。まことに、当今は凌しのぎようなりまして——だ」

しかし、進むというが、蝸かたつむり牛の旅である。一日、計ってみ

ると、三マイル弱。まだパラギル山のしたあたりの位置らしい。

それに、開口のしたあたりでは灰ほんのりと匂っていた、石油ギヤスガスの臭いがまったく今はない。



「どうも風邪を引いたのかな」

とセルカークが気になったように、言いだした。

「折竹君、ガスのおいが全然ないと思うが……」

「そうらしい。たといあるにしろ、小ぼけなやつだろう。採油など、おぼつか覚束ないようなね」

「ふむ」

とセルカークは不機嫌らしく黙ってしまった。当はずれたのではないかと思うが、先があること。まだまだというように氣をとり直すセルカークを見て、折竹はなんて奴だと思ふのだ。すると、その辺から携帯水が氣遣われてきた。

とめどない、渴というような事はまだないのであるが、なにし

ろ、少量しか飲めないもので胃は岩石のように重く、からから渴かわいた食道の不快さに、前途がようやく氣遣われてきた。と、その暗道がとつぜん尽きたのである。白い大きな岩塩の壁が、三人の行手を塞いでしまったのだ。

じゃ、盲道だったのか——と、折竹もまつ蒼になった。ことに、セルカークの失望は甚だしく、油層も晦冥キンメリア国もすべて全部のことが、いまは阿呆の一夕の夢になってしまったのである。

石油の湖水うみ、それに泛ぶ女王ザチの画舫がぼう。なんて、馬鹿な夢を見続けていたもんだと、かえって折竹を恨めしげにみる始末。と、引き返すことになったその夜のことである。寝ている折竹のそばへ這はうようにして、セルカークがそつと忍び寄ってきた。彼が、

目を醒ますと慌てたらしく、

「君、君、何なんだよ。もう開口くちへ出るまでの、水がないんだ」

「全然か」

「いや、三人分のがない」

と言うセルカークの目がぎよろりと光る。なんだか、殺気のような寒々としたものが、この男の全身を覆うているのだ。おやッ、どうも様子が変らしい。こいつ、と思うと厭アな予感がして、

「じゃ、どのくらいあるね」

「一人分だ。俺だけは、生きて帰る」

とたんに、腰の拳銃をにぎった、セルカークの手に触れた。なにをする！ と、突き飛ばされたセルカークはころころと転げ：

：オフシエンコに打衝ぶつかつたらしく、あつと彼の声がする。と、突然の火光、囂ごうぜん然たる銃声。やったな、じぶんだけ生きようばかりにオフシエンコを射ち……次はこの俺と思つた一瞬のこと。天地も崩れんばかりの大爆音とともに……。ああ、かすかに洩れていた油層のガスに引火したのだ。

やがて、雪崩なだれる音が止むと、死のような静寂。折竹は、ほつとして起き上つた。

と見る、なんとという大凄だいせい観かんか　行手を塞いでいた塩壁がくずれ、そこから流れだしたのが原油の激流。油層！　と、思うまに一筋の川となり、みるみるうち倒れているセルカークを押し流してゆく。すると、壁の割れ目をじつと見ていた折竹の目が、と

つぜん、輝いてあつと馳せよつたのだ。そこから、泡だつ原油とともに流れだしてきたのが、一人の女の屍体。

「ザチ、ああザチ」

彼は狂気のようにさげんだ。

ダシュト・イ・カヴィル  
大 塩 沙 漠

の覗き穴から地下へ帰つた、女王ザチが美袍ガウン

を着、いまは死体となつて油の流れにまかせている。夢ではないか。これは一体なんということだろう。暫く茫然としてなすを知らなかつた折竹が、やがて、裳裾の端をつかんでぐいと引きあげた。その、懐中からでたのが、身分証明のようなもの。

——前マリンスキー歌劇場の女優、ナデジータ・クルムスカヤである。当「国家保安部」の一員たるを証明す。

ああ、やはり——と、いま折竹はすべてを知つたのだ。晦冥<sup>キンメリ</sup>国も、地底の住民もこの「大盲谷」にはない。女王ザチも、やはり最初察したように、ソ連の女だった。彼女は対印新攻撃路を求めようという祖国の意志により、まず折竹を探検に誘おうとした。その、クライマックスが大塩沙漠、たぶん、夜、飛行機で驕<sup>ヤ</sup>ッデ・クベータ魔台へ降り、折竹らをみるや、覗き穴を下つたのだらう。それは、晦冥国を思わせる巧妙な手だったが……しかし、それでザチは死ななければならぬ。

鉄の意志——。これも犠牲を自覚した、貴い一人だ。と、彼は<sup>つつま</sup>度しげに礼をした。

大塩沙漠から大地<sup>カラ・シルナガン</sup>軸孔まで、油層の流れにのつて此処まで

来たザチ。ムスカットの宮苑でした別れの意味をいおうとして：  
いま折竹に抱かれています唇は綻ほころび、この運命的な再会を悦ぶか  
のように、ザチの目はうっとりとお開かれています。

しかし、この油層下の道へは、やがて故国の手が……。折竹は  
凱歌がいかをあげた。





## 青空文庫情報

底本：「人外魔境」角川ホラー文庫、角川書店

1995（平成7）年1月10日初版発行

底本の親本：「人外魔境」角川文庫、角川書店

1978（昭和53）年6月10日発行

初出：「新青年」1940（昭和15）年8月号

※副題は底本では、「地軸二万哩《カラ・ジルナガン》」となっています。

※校正には「人外魔境」桃源社、1969（昭和44）年1月25日2刷を参照しました。

入力：笠原正純

校正：鈴木厚司

2014年7月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 人外魔境

## 地軸二万哩

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫  
著者 小栗虫太郎  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>